

2019年度

時間50分 100点満点

帰国生入試

国語

受験上の注意

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
2. 実施時間は50分で、100点満点です。時間配分に注意して解答してください。
3. 解答は解答用紙にていねいに記入してください。
4. 解答用紙・問題用紙両方に、受験番号、座席番号、名前を記入してください。座席番号は、机に貼ってある番号のことです。
5. 試験中は携帯電話の電源を必ず切ってください。
6. 私語や物の貸し借りなどは認めていません。困ったことがある場合は、手をあげて先生に相談しその指示に従ってください。

受験番号 _____ 座席番号 _____

名 前 _____

聖学院中学校

次のページから問題がはじまります

□一 次の文のカタカナを漢字に直しなさい。

- ① バッグはアツデの布で作る
- ② 彼はジキユウ走が得意だ
- ③ 日本にキョジュウしている外国人
- ④ 野菜をコマかく刻んだ
- ⑤ 素早いハンタンが成功の秘訣ひけつ
- ⑥ 両国のリヨウド問題を解決する
- ⑦ 手紙がトドく
- ⑧ 小学校のオンシに感謝する
- ⑨ 時間がないのでカインクに乗る
- ⑩ 二十歳をキジュンにする

〔二〕 次の文章を読み、後の間に答えなさい。(、や。なども一字とします)

お別れ会の当日、かのこちゃんは学校ですずちゃんとあまり話ができなかった。

すずちゃんも、「まだ下の歯が抜けないの」と朝礼帰りの廊下で告げて以降、日がな一日クラスメイトへの対応にかかりきりで、お別れ会でも主役として壇上の席に座り続けたため、二人でようやくゆっくり話ができたのは学校が終わってからのことだった。

すずちゃんの家は学校を挟んでかのこちゃんの家とは正反対の位置にあるけれど、ランドセルを並べ、すずちゃんを家まで送った。今夜はこれから空港近くのホテルに向かいそこで一泊して、明日朝の飛行機に乗るのだとすずちゃんは言った。すずちゃんは依然、抜ける寸前だという下の歯の様子を気にしていた。同じくかのこちゃんも、いよいよぐらぐらしてきた下の歯を舌で探りながら、

「歯が抜けるときの、あのめりめりってすごい音は何だろうね」

と問いかけた。

「歯が肉から離れる音じゃないかな」

「それであんなすごい音がするかな？ 何だか骨が裂けるような音がしない？」

「でも、きつと他の人には聞こえないんだよ」

「そうなのかなあ」

「歯が抜ける寸前の、あの痛いような痒いような感じが本当に苦手」

とすずちゃんはあと少しで抜けるのに最後の一押しが怖くてできない、と我が身の勇気のなさを訴えた。

「お母さんが歯に糸をくくりつけて、ドアノブに結んで、一気にドアを閉めたらすぐ抜けるって言ってたよ」

冗談じょうたんに聞こえなかったのか、すずちゃんの顔が急にこわばるのに気づいて、

「歯が抜けた後に舌したを突つこむと、深い穴が空あいていてびっくりするよね」

と①かのこちゃんは慌わやてて言葉を接ついだ。

「でも、新しい歯がその奥に少し出ているとうれしい」

と相変わらず、唇くちびるの向こうで舌をもごもごさせながらすずちゃんはずいいた。

すずちゃんの家の屋根が道の先に見えてきても、かのこちゃんは明日からのことを何も訊たずねなかった。

すずちゃんも明日からのことをひと言も口にしなかった。

結局、すずちゃんとは歯の話をしただけで、玄関げんかん前まで到着してしまった。これですずちゃんと本当にお別れかと思うと、どこか呆あっけ気ないような、とてももつたいないような気がしたけれど、お祭りの日に、泣かないでお別れしよう、と約束したことは最後まで守りたいと思うかのこちゃんだった。

すずちゃんはいったん玄関に入って、ランドセルを置くとふたたび出てきた。

「元気でね、かのこちゃん」

「うん、すずちゃんも」

そのとき、すずちゃんは「あ」という顔をして、大きく目を見開いた。「どうしたの」とかのこちゃんが声をかけるよりも早く、すずちゃんはいきなり背中を向けると、「またね」と玄関ドアを開けそのまま姿を消してしまった。

音を立てて閉じられたドアの前で、かのこちゃんは呆然ぼうぜんと立ち尽くした。

まだお別れの途中とちゆうのはずとすずちゃんの再登場を待ったが、五分経ってもドアはびくとも動かない。

どうやらお別れの時間は終わってしまったらしい。

②最後の言葉が「またね」というのも、どこまでもすずちゃんらしいといえはすずちゃんらしかったが、何だか別の意味で泣きたくなる気持ちがこみ上げてきて、かのこちゃんはランドセルを乱暴に担かぎ直し、ドアに背を向けた。

どうしてすずちゃんはいつもこうなんだらう、と今さらながら恨うらみ節ぶしを連ね、来た道を戻もどろうとしたとき、

「かのこちゃん！」

と急に頭の上から声が降ふってきた。

驚いて首をねじると、二階の物干し台から、すずちゃんが手を振ふっていた。

「抜けた！」

「え？」

「お別れを言おうとしたら、いきなり口の中に何かが転がって、舌で確かめたら歯だった！ 抜けた歯の裏側うらがわって、崖がけみたいですごく変な感じ」

すずちゃんは手すり越こしに、腕を突き出した。指の間に何となく白いものが見えたが、それよりも笑顔の真ん中のぞく、ぼっかり空いた黒い隙間すきまが何より事実を伝えていた。

「よかったね！」

「ありがとう。でも、ちよつと血の味が気持ちわるい」

「でも——どうして物干しに上がったの？」

③ すすちゃん「え」と一瞬驚いた表情を見せたあと、こうすると突き出した腕を下から振り上げた。

「いい歯になりますように！」

白い影が物干しの屋根の上へ飛んで、音もなく消えた。

思いもしないすすちゃんの行動に、かのこちゃんはポカンと口を開け、歯が消えた空を見上げた。

「知らない？」

「え？」

「下の歯が抜けたら屋根の上に、上の歯が抜けたら縁の下に放ると、次に丈夫な歯が生えてくるんだよ」

いまだ驚き醒めぬ表情のまま、かのこちゃんは首を横に振った。かのこちゃんの抜けた歯は、へその緒がしまつてある木の箱といつしよにお母さんが逐一大切に保管しているのだ。

「今度、やってみたら？」

「うん、試してみるかも」

舌で歯を押しして、ぐらぐらのあとに訪れる鈍い痛みを確かめながら、かのこちゃんはどうもなすいた。

ふと静寂が訪れて、二人は無言で見つめ合った。

「さらばでござる」

物干しから、すすちゃんは厳かに告げた。

そういえば、お祭りで④おとなのお別れをしようと約束したことを思い出し、

「さらばでござる」

とかのこちゃんも重厚に応じた。

「これまで楽しかったでござる、かのこどの」

「拙者せつしゃも楽しかったでござる。達者たつしやでな——すずどの」

「宿題の期限は守るでござるぞ、かのこどの」

「牛乳の一气飲みはほどほどにするでござるぞ、すずどの」

すずちゃんを見上げていると、急に鼻の奥がツンとして、目の下あたりが変にじりじりしてきた。「じゃあね」と手を振って、かのこちゃんは顔を伏せた。そのまま、家に向かって早足で歩き始めた。

しばらく進んだところで振り返ると、すずちゃんは手すりから上半身を乗り出すようにして、布団叩たたきを高らかと振り上げていた。

「ずっと勿頸ふんげいの友でござるぞ、かのこちゃん！」

「一生勿頸の友でござる、すずちゃん！」

「さらば、かのこちゃん！」

「さらば、すずちゃん！」

震ふるえているすずちゃんの声に、せいといっぱい腕を振って応え、かのこちゃんはふたたび歩き始めた。

それきり二度と振り返らなかった。なぜなら、そこで振り返ったらすずちゃんとの約束を破ってしまったことが、簡単にバレてし

* 勿頸：死ぬも生きるも一緒だという固い結びつき

まうからである。

泣きじゃくりながら家に帰ってきたかのこちゃんを、お母さんは玄関でやさしく迎えてくれた。お母さんは夕食にかのこちゃんが好きなたらこスパゲティを作ってくれた。お岩さんのように腫れた目で、かのこちゃんはそれをおいしくいただいた。ベッドに入ってから、ひとりではばらく泣いた。たくさん泣いたおかげで、朝までぐっすり眠った。

九月はかのこちゃんにとって、別れの月となった。

(万城目学 『かのこちゃんとマドレーヌ夫人』)

問一——①について、この時の「かのこちゃん」の気持ちとしてもっともふさわしいものを選びなさい。

ア、わたしのことばですずちゃんが不安を感じてしまったかもしれない。なんとかして気をそらさなきゃ。

イ、しまった！ 冗談じょうたんのつもりで話したけれど、この話はぜんぜん面白くなかったみたいだわ。

ウ、そういえば、私も下の歯が抜けそうだったんだ。歯が抜けるのを想像したら怖こわくなってきた。

エ、冗談のつもりだったのに、私の冗談を真に受けて、すずちゃんの機嫌が悪くなってしまったようだわ。

問二——②について、次の間に答えなさい。

(A)「最後の言葉が『またね』というのも、どこまでもすずちゃんらしいといえはすずちゃんらしかった」とありますが、この時、「かのこちゃん」は「すずちゃん」をどのような性格の人物だと思っていますか。その説明としてふさわしくないものを選びなさい。

ア、気になることを最優先にして他人をかえりみない性格。

イ、最後のお別れであることをうっかり忘れてしまう性格。

ウ、ただらだらとお別れするのが照れくさいさっぱりした性格。

エ、一つのことのにめり込むと周りが見えなくなる性格。

(B) 「何だか別の意味で泣きたくなる気持ち」とありますが、それはどのような気持ちですか。その説明としてもっともふさわしいものを選びなさい。

ア、すずちゃんとの別れは仕方のないことだとわかってはいても悲しいという気持ち。

イ、すずちゃんとの別れが彼女の勝手な行動で台無しになって腹が立つ気持ち。

ウ、すずちゃんのお別れを上手にできなかった自分を不甲斐なく思う気持ち。

エ、すずちゃんのお別れが不満足な形で終わってしまったって残念だという気持ち。

(C) 「ランドセルを乱暴に担ぎ直し、ドアに背を向けた」とありますが、この時の「かの子ちゃん」の気持ちとしてもっともふさわしいものを選びなさい。

ア、すずちゃんだから仕方ないとあきらめている。

イ、すずちゃんのお別れを悲しんでいる。

ウ、すずちゃんにあきれている。

エ、すずちゃんに対していらだっている。

問三 — ③について、「すずちゃん」はどんなことに「驚いた」のでしょうか。五十字以内で答えなさい。

問四 — ④について次の間に答えなさい。

(A)「おとなのお別れ」とはどのようなものですか。十五字以内で説明しなさい。

(B) 「おとなのお別れ」をするために二人がしていたことは何ですか。ふさわしくないものを選びなさい。

ア、二人でお話をするのは今日で最後だということを話題にしない。

イ、なるべく笑顔で別れられるよう、無理やりにでも明るくふるまう。

ウ、普段とは違う、二人にとって特別な話し方でお別れをする。

エ、どうしてもいい話題ばかり話して、普段通りにふるまおうとする。

三 次の文章を読み、後の間に答えなさい。なお、出題の都合で改めた所があります。(、や。なども一字とします)

「見た目」は人それぞれで違います。

子どもの頃は、その違いを当たり前のように受け止めていたように思えます。だから、人の容姿に関する違いについても、「メガネザル」とか「おでこ広いぞ」とか、なんの①屈託もなくズケズケと言いつ合っていました。

ところが、ある時期になると、単なる違いとして認識していたからだの特徴は「欠点」だということに気がついてしまう。おそらく、先生や親、クラスの誰かから「人の欠点をそんなふうにはいけません」と教えられたのでしょうか。「メガネザル」と言われた子が泣いてしまったからかもしれない。いずれにせよ、その「違い」は人前では堂々と言つてはいけないものだということを知った。そして、欠点とは、単なる人との「違い」ではなくて、本人の前で口にはいけないうことだと理解したのである。

では、なぜ「違い」が「欠点」になったとたん、本人の前で口にはいけないうことだと認識したのである。もちろん、「欠点」とは「欠けているもの」「劣っているもの」「足りていないもの」であつて、人の短所であり、好ましくないことを知っているからである。悪口を言つても言わなくても、違いは違いとして変わらずそこにある。けれども、それが短所であり、好ましくないものであるとわかると、その違いを見ないようにして目をそらし、本当は見えているのに「欠点」を隠し始める。だから、悪口を口に出して言わなくなる。悪口を言わなくなるということは、子どもなりに「隠し事」を始めたからだと言うことができるのです。

このように他人の「欠点」を発見すると同時に、子どもは自分自身の「欠点」も発見しています。人と自分の「違い」を「欠点」として認識するというのは、自分のなかの「欠けているもの」「劣っているもの」「足りていないもの」に気づいてしまうということ。

それと同時に、「欠けている」「劣っている」「足りていない」ことに対するコンプレックス、恥はずかしさの気持ちが生じてしまう。僕たちのからだは自分への隠し事だらけです。鏡の前で、ひとりになった時に生じた「恥はずかしい」という思いも、自分への隠し事。僕たちは人との違いを意識している割には、自分のからだのことをあまり見ていないのかもしれないかもしれません。

「見た目」を気にすることは、「からだ」を気にする意識でもありません。「見た目」は、人と接する時、最初に相手の目に映る姿でもあるし、自分で自分を認識する姿でもあるのです。

こうした「見た目」について考えている時に、みなさんは、写真のように動かないでいる自分の姿を思い浮かべていませんか？ 鏡の前に立って自分の顔や姿を眺ながめている時も、たいていは止まったままの姿です。ところが、見た目と言う時、からだは止まったままではありません。動いてこそ美しさを発揮はっきするのです。

そんなこと言っても、自分はダンスもできないし、キレのある動きなんてちつともできないと思うかもしれません。でも、僕の言う動きとは、そうした表現であったり、誰かに見せるための動きではありません。

写真に写っているあなたをひとつの「点」であると仮定します。点であるかぎり、どっちの方向にも動かない。当たり前のことだけど、点は点でしかないのですから。

ただ点動きが始めたら、すぐにたくさん情報が見えてきます。ちよつとも動いたとたん、その人がどうやってそこまで歩いてきたかというのも想像できるし、これから向かおうとしている場所をイメージできるおもしろさがある。

点だけだと、過去も未来も見えてこないけど、そこに動きが生まれると、大きな流れの中での美しさが見えてくる時がある。それは、立ち居振いふ舞まいの美しさかもしれないし、思いやり、潔さ、②きつぷのよさ、気前のよさ、軽やかさ、かもしれない。人生とい

う時間の過ごし方、愛情についての捉え方とらなのかもしれない。それぞれの生き方の積み重ねというのが、点から線へと動きが生まれた時に、自然と見えてくる。もちろん、僕は「点」として止まっている姿よりも、「線」となった動きのほうに魅力みりょくを感じます。点だけで判断する美しさに「生き方」は問えないけれど、線となった「動き」にはその価値を見いだせる。動きを見ていたら「生き方が好き」と言うこともできる。

僕たちは、時間の流れの中で生きています。

時間というものは、現在という瞬間しゅんかんだけで存在しているのではなく、過去から現在、未来へとつらなる流れの中で成り立っている。つまり、時間というものが流れである以上、現在という点はどうしても線になる。写真は、流れゆく時間をほんの一瞬とらえて、点を打っただけのこと。③誰かの過去を、標本として捉えたものにすぎません。その前後にはよどみなく流れる人生という時間があるのです。

動きにおける「間」の取り方は、とても重要です。動きと動きの間にはさまれた、いわばクッションのような時間。この「間」を取るタイミングや長さによって、その人が置かれている状況じょうきょうや気持ちの余裕よゆうの有無、人への思いやりのようなものが見えてくる気がします。

その「間」は非常に個人的なものだから、そこに「いい間」「悪い間」という道徳的な価値はない。もしかしたら、マナー講座的に言うと、相づちはリズムカルに④間髪かんはつ入れずに打つほうがいいとする「正解」があるかもしれない。でも、人によって適正なテンポというものがあるはずだから、それを見失わなければいいと思っています。

⑤ 僕がこれまでに、ほればれと見とれてしまった動きのひとつに、日本舞踊の踊り手のかたの所作しよさがあります。一緒に歩いてい
時の身のこなし方、雨が降ってきた時に、取り出した傘かさをすつと開いてかざすという流れ、水たまりのよけ方など。ひとつひとつの
動きに人への気配りや注意だけではない意識の高さを感じたんです。

彼女の場合、舞台の上では、日本舞踊という型みかによって磨き上げられた特殊な動きとくしゅをする人。だから、そういう人が、日常生活で
の動きに、舞台の上での動きが影響を与えるのは、当たり前のこととも言える。それが彼女にとつての日常であり、人生だから。だ
からこそ、どきつとして見てしまったのかもしれない。同じ動きを他の人が同じようにやったからといって、いいわけではない。

もうひとつ、ほればれとした動きとして思い出したのは、とある男子中学生のもの。彼とは広島で行ったワークショップ*で出会っ
ただけど、その20人くらいのワークショップで最年少だったにもかかわらず、やけに肝きもつ玉がすわっている。その肝つ玉のすわ
り具合を、なぜか僕は「美しい振る舞い」として受け取ったんです。

その動きは全然完成されたものではないのだけど、堂々として、40歳くらいの人とペアを組ませてもたじろぐことなく、謙遜けんそんす
ることなく、逆に相手をリードしていく。中学生とは思えない、落ち着きっぷりに感心しつつ、どうして、そんな堂々としていられ
るんだらうという驚嘆きまうたんの気持ちだが、美しいと思う気持ちへ変わったのかもしれない。彼は僕にとつて、ある意味、未知の存在で
した。ませた中学生という感じでも、空威張りからいばしている感じでもありません。こうした動きを「⑥身の丈たけに合った振る舞い」と考え
ると、腑かに落ちるような気がします。彼は、もしかしたら「身の丈」を感じる天才児だったのかもしれない。自分がいる空間くわんを把握はあく
して、その場所における自分の適切なサイズというものを理解して、自分の大きさを調整していたのかもしれない。

（近藤良平 『からだと心の対話術』）

* ワークショップ：本来は「作業場」という意味。参加者が自ら体験することで、学び合い、新しく創り出す場や機会を指す。

問一 —— ①・②・④の意味としてもっともふさわしいものを選びなさい。

①：「屈託もなく」

ア、力の弱い者を思いやるさま

イ、ためらうことがないさま

ウ、自信に満ちあふれたさま

エ、堂々としているさま

②：「きつぷのよさ」

ア、お金を出し惜^おしみしない性格

イ、生まれ育ちのよい雰^{ふん}囲^い気

ウ、思い切りのよい気性

エ、上品な服装

④：「間髪入れず」

ア、すぐさま

イ、適切に

ウ、前もって

エ、落ち着いて

問二 「違い」と「欠点」についての筆者の考え方としてもっともふさわしいものを選びなさい。

ア、「違い」は単なるからだの特徴を意味するが、それを恥ずかしいものととらえ、隠そうと思ったときに「欠点」として認識される。

イ、ともに自分のからだの特徴を表すが、「違い」は自信をもっている部分を指し、「欠点」は劣っていてコンプレックスを感じる部分を指す。

ウ、子どもたちの世界に特有の区別であり、ズケズケ言い合ってもよい特徴を「違い」と呼び、本人の前で口に出してはいけないう特徴を「欠点」と呼ぶ。

エ、ともに人の容姿に関する特徴を指すが、「違い」は自分にも他人にも見える特徴であり、「欠点」は自分には分からない特徴である。

問三——③を説明した文としてもっともふさわしいものを選びなさい。

ア、いつかは手に入れたい望ましい姿として、美しい人物にあこがれること。

イ、静止したまま動かない映像として、自分の容姿を思い浮かべること。

ウ、自分の過去を理想化して、幼いころの自分の記憶をくり返し思い返すこと。

エ、多くの人が共通して体験することを聞いて、自分もそれを体験したように感じること。

問四——⑤について、「日本舞踊の踊り手のかたの所作」が美しかったことについて、筆者はどのような理由を挙げていますか。もっともふさわしいものを選びなさい。

ア、日本舞踊の稽古けいこによって一定のテンポを身につけ、相手を安心させることができるから。

イ、他人に対してへり下る姿勢しせいが身につけており、相手の気持ちに寄り添よそってふるまうことができるから。

ウ、毎日の生活を通して、日本人独特のリズミカルな動きが自然と身につけているから。

エ、日本舞踊の型によって磨き上げられた動きが、日常での動きに影響を与えているから。

問五 ——— ⑥はここではどのような意味ですか。二十字以内でぬき出しなさい。

問六 次のの中から筆者の意見と合うものを選びなさい。

ア、自分が「欠点」だと感じている容姿の特徴について人に指摘されると嫌な気持ちになるのだから、他人の容姿に関する違いについて、本人の前でズケズケと口にするのは控えた方がよい。

イ、自分が気にしている「見た目」とは、多くの場合、止まったままの姿をイメージしているが、相手の目には動くものとして映っており、「見た目」の美しさはその人の動きのなかにこそ発見されるものである。

ウ、すべての人にそれぞれの「間」の取り方があり、そこにはよい・悪いという価値がないのだから、自分の「見た目」は、たとえ自分がそれを「欠点」だと受け取っていても、他人の目には「欠点」とは映らない。

エ、筆者がほれぼれした「とある男子中学生」の動きはとても堂々としていたが、それは天性の才能ではなく、大人たちと努めて接し、いろいろな経験を重ねるといふ日ごころの心がけによって磨かれたものである。

三						二					一				
問六	問五		問四	問三	問二	問一	問四		問三			問二	問一	問一	
						①	B	A				A		⑥	①
						②						B		⑦	②
						④						C		⑧	③
														⑨	④
														⑩	⑤

受験番号
座席番号
名前

2019年度

入学
考
査
問
題

国語・解答用紙

聖
学
院
中
学
校